

～違いを認め一緒に生きていくことができる優しい社会～

小椋武夫様、手話通訳：山口千春様

こんにちは。遠く離れたシドニーからオンラインで参加させて頂いています。シドニーでは看護師として働いています。今日のお話を伺う中で一番驚いたこと、それは——まるで小椋さんがお話ししているかのように聞き入ってしまったことです。山口さんが小椋さん？小椋さんが山口さん？息がぴったりで、何の違和感もありませんでした。素晴らしいお二人のタッグに脱帽です。

お話の中で、次のことばにハッとしました。

“ろう者”→話せない→能力が低いと思われてしまう。

“外国人”が日本に来る→うまく話せない→能力が低いと思われてしまう。

私は“外国人”としてオーストラリアに移住し働いていて、後者の扱いを受けた記憶があります。

日本でも看護師でしたから、オーストラリアに住んだからといってケアが変わるわけではありません。ただ、最初のころは英語をうまく使うことができず、思うように伝えられないことが原因で自分自身でもイライラしてしまうことがしばしばありました。このような状況は、相手からすれば『この日本人看護師は何もわかっていないのではないか？』となるわけです。惨めな思い、くやしい思いもたくさんしてきました。能力が低いと決めつけられることへの怒り。。。努力することで、だんだんと認められ、チームの一員として気持ちよく仕事ができるまでには3年くらいかかったような気がします。

私の働いていた病院にはろう者の看護師さんが1名働いていました。病棟は違いましたが、たまに院内で会うので最初は挨拶から始まり、お互いに顔見知りになり、簡単な会話を交わすようになりました。彼女は口の動きを読み取り、理解しコミュニケーションが取れていました。そして、一人前の職員として雇用され働いていることにびっくりしました。当時の日本では考えられない事でした。「病院の障害者に対する理解」と「雇用における差別をしない」という病院の考え方に感動しました。日本では2016年に『障害者差別解消法』がスタートしたと聞き、オーストラリアと比較すると遅れているなと感じました。

オーストラリアは障害者・障害児にとってもやさしい国です。小椋さんは『特別なことを願うのではなく、少しでも配慮をしてもらいたい。社会の中で一緒に暮らしていきたい。生きていきたい——このことを理解して頂きたい。』と話されました。本当にそうですね。

耳が聞こえない・目が見えない・身体の一部が不自由という事で差別につながるのではない社会に。。